

分科会 C 日本の大衆文化

総括

内田 忠賢

大衆文化は、都市文化、現代文化の代表選手と言える。時代や社会の動向を敏感に察知して、刻々と変化してきた。最近の研究では、映画、テレビ、漫画などマスメディアに関わる対象をめぐって、多くの社会学者などが議論している。また、衣食住をはじめ、ペット、化粧など、日常生活の流行現象をも、大衆文化研究は扱ってきた。

本分科会では、特に大衆娯楽について話題提供を行う。大衆娯楽のうち、現在では周辺的大衆文化と位置付けられる、街頭紙芝居、女子プロレス、見世物を事例とする。従来の大衆娯楽研究では、その芸術面やマスメディアの社会性が問題にされてきた。今回のような事例は、従来の研究では軽視されてきた対象である。これらの事例は、大衆娯楽のシンプルな形態、原初形態を示す。大多数のマスメディアとは異なり、人間対人間が face-to-face の関係から大衆娯楽が生み出されてきた。コミュニケーションとしての芸と言って良い。今回は、演じる側から見た観客論、上演論を具体的に提示したい。

報告者は、若手ながら、それぞれのジャンルでの第一線の研究者である。地道な長年のフィールドワークに基づいた研究成果を具体的に発表した。学者にありがちな、“あかぬけて” “高級そうな” 研究対象を抽象的に “小難しく” 論じることを避けて、身近な大衆娯楽を素人にも分かりやすくお話しいただいた。